

メトロポリタン史学会 第十回総会・大会のお知らせ

下記の要領でメトロポリタン史学会の第10回総会・大会を開催します。大会では「現生人類の北東アジアから日本への最初の進出」をテーマにシンポジウムを行います。会員の皆さんの参加をお待ちしております。

- 日時 2014年5月17日(土) 午前10時30分～午後5時
会場 首都大学東京 本部棟1階・大会議室
(京王相模原線南大沢駅下車 徒歩約10分)
日程 ①総会：午前10時30分～12時
②大会：午後1時40分～5時

シンポジウム「現生人類の北東アジアから日本への最初の進出

——DNA証拠, 人類化石証拠, そして文化残滓証拠は同じストーリーを語るのか?——

趣旨説明 (出穂雅実氏)

研究報告

[報告者]

出穂雅実氏 (首都大学東京)

「最終氷期最盛期の北東アジアと古サハリン——北海道北海道-千島半島
における狩猟採集民の技術的・行動的適応——」

海部陽介氏 (国立科学博物館)

「東アジアの現生人類化石証拠とその系統」

安達登氏 (山梨大学)

「北海道の縄文時代人骨のミトコンドリアDNA分析によって見えてきた北東
アジア旧石器時代人の系統」

全体討論：午後3時45分～5時

司会 岩瀬彬氏

③懇親会：午後5時30分～7時30分 (会費4000円)

〔シンポジウムの趣旨〕

分子遺伝学者、形質人類学者、そして考古学者は、日本列島の現生人類の起源の研究を続けてきた。シンポジウムでは、まず、これら三分野の研究者が主張する仮説をそれぞれ提示する。その次に、それぞれの仮説の共通点と相違点を明確にし、これまでわかったこと、わかりはじめてきたこと、そしてこれから追求してゆくべき点を討論してゆく。

特に、北東アジアと日本との関連に焦点をあて、次の研究疑問に挑戦する。(1) 現生人類はいつ北東アジアに出現したか？(2) 現生人類はいつ北東アジアから古サハリン—北海道—千島半島に進出したか？(3) 古サハリン—北海道—千島半島に出現した現生人類はどのような技術的・行動的適応によって植民を成功させたのか？(4) 植民を成功させた現生人類は、その後どうなっているのか？

2013年10月6日(日)、第6回歴史探訪「登戸研究所に見る旧日本陸軍「秘密戦」の実態—明治大学平和教育登戸研究所資料館見学—」を開催し、多くの方にご参加いただきました。

第6回歴史探訪参加記

落合延孝(群馬大学名誉教授)

第6回歴史探訪は秋晴れの2013年10月6日(日)に行われました。参加者は約40人でした。今回は明治大学平和教育登戸研究所資料館の見学です。参加しようとした動機は、若い頃読んだ松本清張の『小説帝銀事件』の中に登戸研究所(第九陸軍技術研究所)が出てくるからです。

小田急生田駅から山道を登り、20分程歩いて資料館に着きました。館内では山田朗館長(明治大学教授)から詳しい説明を聞きながら展示室を見学しました。



第一展示室は、

登戸研究所の全体像を紹介しています。11万坪の敷地に約百棟の建物があり、約千人の人々が働いていました。研究所の兵器開発は、スパイ機材・偽札・風船爆弾などがありました。登戸研究所が研究する秘密戦(スパイ活動・謀略工作・偽札など)は、日中戦争の拡大・長期化とともに日本軍の作戦のなかで大きな比重を占めるようになったことを知りました。

第二展示室には風船爆弾が展示されています。実際には搭載されませんでした。牛に対して強い感染力を持つ病原体を兵器化したもので、これを散布することでアメリカの家畜を殺傷しようとする計画でした。

第三展示室は、生物兵器・毒物・スパイ機材などの研究開発を行った第二科の活動を紹介します。第二科は諜報・謀略活動に関係し

て、七三一部隊や中野学校・特務機関・憲兵隊と関係が深かった部署であることが分かります。この部署は高度な専門性が求められ、化学・医学・薬学・農学・写真などを専門とする技師が働き、他の研究施設・大学・民間企業と協力して研究が進められていました。細菌を散布する生物兵器では、稲の害虫であるニカメイチュウを兵器化して、1942年に中国湖南省で散布実験が行われました。

第四展示室は、偽札製造を行った第三科の活動を紹介しています。

第五展示室は、登戸研究所の長野県への移転の様子を展示しています。ここでは石井式濾水機濾過筒が展示されています。細菌戦実施の際に日本軍の飲料水を確保する目的で開発された装置です。

戦後の平和主義を否定しようとする最近の政治状況を考えると、資料館の展示が語りかけるものは、「遠い昔」の話ではなくこれからも起こりうる怖さを実感しました。

1980年代には高校生たちが「平和ゼミナール」活動のなかで、登戸研究所に関する調査活動を行い戦争と向き合っていました。この研究所が「平和教育の場」として活用されることを強く願っています。

最後に展示の詳しい説明をして下された山田朗館長にお礼を述べます。



【シンポジウム参加記】

「第1回若手研究者の集い」参加記

東京大学大学院人文社会系研究科
韓国朝鮮文化研究専攻（歴史文化） 大沼巧

「若手研究者の集い」はメトロポリタン史学会始まって以来、初めての試みであった。以前には、毎年二回シンポジウムが開かれており、質の高い発表と議論がなされてきた。これらシンポジウムは、その分野におけるトップクラスの研究者の発表を聞くことができる貴重な機会であり、学ぶ点が少なくなかった。しかし、大学院生などの若手研究者に発表機会が与えられることはほとんどなかったため、若手は参加しづらい雰囲気があった。そのような中で、今回の企画のことを知り、首都大の先輩方の発表を聞くこともできる良い機会だと思った。その反面、今までほとんど参加することのなかった学生・院生が、企画が変わったからといって、すぐに参加するようになるか不安であった。しかし、この不安は杞憂に終わった。2, 30人ほど収容可能な教室はほぼ埋まり、それぞれの発表者の質の高い研究のもと、活発な議論がなされた。

今回の大会では共通のテーマはなく、個別テーマでの報告と書評であった。プログラムを順に並べると、山崎文理氏「国共内戦期、太行区における女性の動員」、日置秀太氏「中世末期北イタリアにおける幼児へのまなざし—フィレンツェの作家たちとジョヴァンニ・ミケーレ・サヴァナローラの比較から—」、清水光明氏「書評 清水有子『近世日本とルソン—「鎖国」形成史再考—』」、堀川康史氏「書評 須田牧子『中世日朝関係と大内氏』」の四報告であった。

山崎報告は、中国共産党による支配地域での民衆の掌握と組織化に関して、女性をどのように動員していたのかという観点から具体的に考察したものである。新聞史料の分析を通じて紹介された数多くの事例は、

それぞれ興味深い内容であった。そして、女性が動員される背景（男性の出征による労働力不足など）や動員された際に起こった問題点、男女平等という観点からみた当時の女性動員の限界性など、さまざまな指摘がなされていた。少し残念だったのは、地域を限定したために、使える史料がほとんど新聞に限られてしまい、当時の女性が直接伝える言葉や情報に関する紹介がほとんどなかったことである。近年では、地域によっては当時の人の発言を記録したものなども出てきているということであったので、今後はそのような史料も用いて、より深い考察がなされることを期待したい。

日置報告は、中世末期の北イタリアにおける幼児観をさまざまな職の人を対象として比較考察したものであった。私は、西洋史に関して無知だが、考察対象としてさまざまな身分の人の考えが扱われており、そこから中世末期の北イタリアの人々の思想や社会を垣間見ることができたので興味深かった。

清水光明氏の書評は、清水有子氏が著書で指摘した二国間（日本―スペイン間）に存する多層的な関係やルソンの様相、幕府の対応などに関して、未読者にもわかりやすく要約した上で、それに対する疑問や批判が提示されていた。批判や疑問点の多くは、本書の内容を正面から批判したものというよりは、本書の内容のなかで不足していた部分を指摘する建設的な内容であった。幸い、著者の清水有子氏が参加していたので、指摘された部分を補う説明もなされ、大変勉強になった。

最後に、堀川氏の書評では、まず須田氏の著書の最大の成果を「対外関係史」と「国内」史を結びつけ大内氏の対朝関係をめぐる様々な事象を、幅広い文脈のなかに位置づけることに成功している点であるとした。その上で堀川氏の専門とする守護研究の視覚から様々な批判がなされた。それぞれの章に対して行われた多岐にわたる批判を簡単にまとめることは難しいが、特に印象に残ったのは、足利氏と大内氏との関係に対する堀川氏と須田氏の見解の差である。須田氏が大内氏の位相を高く評価しようとするのに対し、堀川氏は当時の国内情勢を示した上で比較的低い評価を下していた。議論では、著者の須田氏を交えて、そのような対立点などが論じられ興味深かったが、史料の限界のため十分に論じられない部分も多かったように感じられ、少し残念だった。

以上のように第一回「若手研究者の集い」は大変有意義なものになったと思う。今後もこのような若手研究者の交流を通じて本会が一層発展することを期待したい。

【投稿のお願い】

本会では、会員の皆様の積極的なご寄稿をお待ちしています。広く、歴史研究・教育の諸領域にかかわる内容のものを求めます。

『メトロポリタン史学』(The Metropolitan Shigaku) 投稿規定

- (1) 本誌は、年一回12月に発行するものとし、原稿の締切は、毎年8月末日とする。
- (2) 投稿資格は、原則として会員に限る。ただし、編集委員会からの依頼原稿に関してはこの限りではない。
- (3) 投稿言語は、日本語または英語とする。
- (4) 投稿原稿は、歴史学・考古学、歴史教育の分野に関する以下の種目のものとする。
 - ①論文（図表を含み、24,000字以内；英文の場合は、8,000語以内）
 - ②研究ノート・史料紹介（同 12,000字以内；英文の場合は4,000語以内）

③学界動向（8,000字以内；英文の場合は2,700語以内）

④時評・提言（4,000字以内）

⑤書評（4,000～8,000字）

- (5) 論文、研究ノート（縦書き、横書きいずれも可）には、欧文で要旨（300語以内）を添付する（原文が英文の場合は日本語要旨800字以内）。また目次用の英文タイトルを付記する。
- (6) 原稿は、編集委員会が採否を決定する。その際、論文、研究ノートについては、編集委員会および編集委員会が委嘱した査読者の審査を経る。
- (7) 著者校正は、初校のみとし、校正時における文章の大幅な変更は認めない。
- (8) 注は、末尾にまとめる。
- (9) 原稿は原則として、印字された原稿（表、図表を含む）3部、USBメモリなどの記憶媒体及び別記送り状*（1部）を提出する。
- (10) 掲載の論文、研究ノート・史料紹介、学界動向については、別刷り50部を進呈する。
- (11) 原稿の送り先、照会については、

〒192-0397 八王子市南大沢1-1 首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系

国際文化コース（歴史・考古学分野） 河原 研究室気付

『メトロポリタン史学』編集委員会

Tel: 0426-77-2119（河原研究室） Fax: 0426-77-2112

E-mail: kawara28 tmu.ac.jp（河原温研究室内）SNC47077 nifty.com（河原温）

（●は@に変換して入力して下さい）

* 送り状は学会ホームページ（<http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>）からダウンロードしたものをコピーするか、事務局にご照会ください。

【事務局からのお願い】

●メトロポリタン史学会会報第15号をお届けします。第10回総会・大会のご案内をいたしております。会員の皆様の奮ってのご参加をお待ちしております。引き続き会財政健全化のため、年会費を年度内にお支払い下さい。未納が多額の場合は、分割でお支払いいただいても結構です。特に、今年度は会財政が逼迫しております。一般5,000円、学生・院生3,000円です。郵貯口座をお持ちの方は、ATMで直接当会口座の記号番号を入力して手続きすれば、手数料80円がかかりません。何卒ご協力のほどをお願いします。

メトロポリタン史学会（会長 佐々木隆爾）

〒192-0397

東京都八王子市南大沢1-1

首都大学東京 都市教養学部 人文・社会系 国際文化コース 歴史・考古学分野内

TEL: 0426-77-2110（木村誠研究室） E-mail: mshigaku tmu.ac.jp（●は@に変換して入力して下さい）

ホームページ: <http://www.geocities.jp/metropolitanshigaku/>

郵便振替: 00100-0-537287 メトロポリタン史学会